St. Luke's International University Repository

学術活動報告(1995年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/320

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

学術活動報告(1995年度)

WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター

〈今年度の活動〉

1．1995年国際看護学術集会(JANS)への参加（9月）

学術集会Information Exchangeに参加し、WPROにおけるWHO看護／助産開発センター活動の現在と将来の方向性をテーマに、シンポジウムを企画し、10カ国100余名の参加を得た。WHOジュネーブ本部看護担当官 Dr.Hirschfeldからご挨拶いただき、シンポジストにオーストラリア、韓国のセンター代表を迎え、互いの活動について報告しあったのち、参加者との討議を行った。

2．活動報告書(Annual Report)の作成・配布（10月）

当センターの活動報告の5巻目として、1994年4月～1995年3月までの活動報告と研究を10月に作成し、国内関連省庁および看護大学等58ヵ所、国外関係機関およびWHOセンター等38ヵ所に配布した。

3．研究活動

1）ヘルスプロモーションの視点から高齢者のＱＯＬを高める地域ケアのシステムづくり（笹川医学医療研究財団研究助成）

高齢者のQOLを高めるため、多様なライフサイクルの人々からなる地域ケアシステムについてヘルスプロモーションの観点から検討する研究を行っている。

2）「老人ケアに関する文献検討」の実施（7・8月）

1991年より懸案であった老人ケアに関するWPRO共同研究のテーマを見いだすために、デルファイ法の結果を踏まえ、在宅高齢者の受けるインフォーマル・フォーマルサポートの実態について文献検討を行った。デルファイ法および文献検討のまとめをWPRO各センターに報告した。

3）諸外国の変動する看護システムに関する研究（平成7年度厚生省看護総合対策事業助成）

わが国の准看護婦制度における今後の方向性に関する政策に反映される示唆を得る目的で、欧米先進国の看護システムに関する調査を行っている。本研究に関しては、1996年3月14日に発表の予定である。

4．第8回 グローバルネットワークミーティングへの参加

1996年3月3日～7日、中東Bahrainで行われる第8回WHO Collaborating Center for Nursing and Midwiferyグローバルミーティングに、センター長はじめ代表を派遣する予定である。

5．その他

1）情報活動

(1) 雑誌『看護』「WHO発看護行き」連載（1994～1995年の2年間にわたる連載を終了した）

(2) 雑誌『助産婦』「WHOから助産婦への手紙」8月号より連載開始

2）教育的援助計画

WHO西太平洋地域アドバイザーからの要請で、ラオスに教育的援助を行うべく、1名の派遣が決定した。今年中に派遣の予定であったが、相手国の都合で中止となった。

（センター長　小島操子）

スタッフ教育委員会

スタッフ教育委員会では、スタッフの教育ならびに研究に資する能力の向上を目的に、教育セミナーや研修会、講演会等を企画・実施している。1995年度は、以下のような内容を実施した。

〈教育セミナー〉

12月21日：講　師：日野原茂雄先生
　　内　容：「スクリーニングと健康教育」

〈スタッフ研修会〉

7月25日：教員研修会：カリキュラム委員会と共催
　　内　容：新カリキュラム変更後の情報・意見交換
　　操　　華子：「環境論Ⅰ」に参加して
　　太田喜久子：「生活と環境」
　　岩井　郁子：「看護提供システムⅠ」
　　菱沼　典子：「形態機能学」
　　伊藤　和広：「対人関係論」

11月7日：特別講演
　　講　師：Carolyn Byrne 先生
　　テーマ：「マクマスター大学看護学部における看護教育」

12月21日：研究・教育活動報告
　　毛利多恵子他：助産学生が企画・実施した出産準備教育
　　－妊娠中のカップルのニーズを満たすためのいくつかの試みと学生の学び－
　　小山眞理子：看護大学における教授学習方法の改革に関する研究
　　森　　明子：新しい教育方法の試み　－妊娠期看護のPBL－
　　横山　美樹他：(報告)聖路加看護大学入学生の看護ならびに本学の選択動機
　　宮坂　義彦・助川　尚子：教育評価について
　　中山　洋子：人的資源の確保に関する研究
　　－看護婦にとって魅力的な病院の管理システム－

〈レクチャーシリーズ〉

講　師：Toni Harrington 先生
11月14日：第1回：急激に変化しつつあるアメリカのヘルスケアシステム
11月21日：第2回：急激に変化しつつあるアメリカのヘルスケアシステム
11月28日：第3回：アメリカにおける看護教育の変遷と今後の課題
12月5日：第4回：アメリカにおける看護教育の変遷と今後の課題

〈新採用者オリエンテーション〉

平成8年度新採用者のオリエンテーションの企画・準備

（スタッフ教育委員会　委員長　太田喜久子）

第28回公開講座A

CNS／専門看護師の教育 ークリニカル・トレーニングに焦点をあててー

いよいよ日本看護協会は'96年の年明け早々に専門看護師の認定試験を実施とのこと、本学大学院修士課程修了生も何名か受験することになっている。研究科のカリキュラム見直しも軌道にのり、修論コースとCNSコースの2本立てに分かれて進みそうである。こうしてようやく本格的にCNSの養成が日本で始まることになる。

ところで、公開講座のメインテーマに、クリニカル・トレーニングに焦点をあてて、というサブタイトルをつけた。CNSコースを設けるといっても、実習でどのような臨床力を開発できるかが問われるわけで、これは容易なことではない。大学院教育の中で、どのように臨床現場と手を組むかがポイントになるところである。本来、高等教育機関は研究志向であるのだが、CNS教育にあっては実践を重視することになる。研究志向と実践志向とをどのようにしてうまい具合にブレンドすることができるか。

講師には、実践重視の修士課程で広く知られるイェール大学看護学部長、Judith B. Krauss先生、そしてお隣の韓国から延世大学看護学部成人看護学教授のCho-Ja Kim先生をお招きした。アジアの国から講師をお呼びするのは今年が初めてのケースである。韓国も、目下、CNSの資格化にむけて動き出したばかりである。本学からは、修士課程のカリキュラムについて小島操子研究科長が、国際病院とのユニフィケーションについて岩井郁子教授が講演をされた。パネルには、東京医科歯科大学の松岡恵氏、本学修士課程1年の斉院由紀子氏、聖路加国際病院の中村めぐみ氏が参加、それぞれの立場から率直でパワフルな見解が発表された。このような討議を今後も十分に重ねることが、CNS教育を成功させる秘訣だと実感した。

公開講座も28回を迎え、ＡＢＣ会館ではこれが最後となり、来年からは新校舎の講堂で行われる。これを機に、内容もさらに一層、充実したものを企画していきたい。

（公開講座Ａ委員会 委員長 羽山由美子）

第18回公開講座B

若い人の健康管理と，老人の健康管理はどう違うか ー私の体験からー

公開講座Ｂは、企画の段階から地域の方々とともに運営を行っている年1回の地域公開講座である。年々、地域の方々の御関心が高まっており、今回で第18回目を迎え、平成7年は3月15日(水)午後6時30分より、聖路加看護大学アーツルームにおいて、テーマ「若い人の健康管理と、老人の健康管理はどう違うかー私の体験からー」について、日野原重明学長が講演された。講演内容では、阪神大震災が本年1月にあったことから、日本における災害時の医療の現状、災害時における聖路加国際病院や聖路加看護大学の対応についても話された。参加者は60名で男性6割、女性4割であった。年代では60歳代が最も多く38.2%、次いで50歳代が32.4%、その他の順であった。質疑応答では、活発に意見交換がなされ,「時間が足りない」という参加者の感想があった。終了時のアンケート調査結果から、ほとんどの方が「大変良かった」と答えており、具体的には「大変わかりやすく、参考になった」「生活、年齢などで、健康に対する考え方が変わった」「老人にはそれなりの健康があり、小さな検査値を気にしないで生活するというお話に希望がわいた」「QOLは確かに必要であると思った」等であった。今後についても、「心の健康、豊かさ」「運動と栄養と病気との関係」等々、健康に関する様々なテーマを取り上げて欲しいと積極的に希望を述べておられる方が多かった。

（公開講座Ｂ委員会 委員長 飯田澄美子）

海外の研究者との活動

Dr. Gail Kuhn Weissmanの招聘について

マサチューセッツ総合病院（MGH）の新しい看護部長（1994年～）ワイスマン博士が、1995年4月上旬に来日された。MGHは、日本から多くの医師の研修や留学を受け入れて交流が深まっているが、ワイスマン博士は看護の人材の日米交流も今後は活発に進めて行くことが必要であるとの考えから、4月10日(月)に本学を訪問され、講演された。講演のタイトルは「New Care Delivery Models」であり、本学の教員や大学院生ならびに病院からも多くの方の参加があった。日野原重明学長によるウエルカム・スピーチに引続き、MGHで行われている看護ケア提供モデルの変化を、新旧を対比させお話いただき、さらに、看護部で行っている教育プログラムを紹介された。それは、患者の看護や看護体制の再編成からシステム管理や総合的なケアネットワークの創設までに渡る内容であった。質疑応答では、専門家の種類の多い場合のケアサービスの統合の仕方や、CNSのカリキュラム開発、米国のヘルスケア改革の背景とコストおよび患者ニーズなどについて活発に討議が行われた。最後に小島操子学部長が、ご自身のMGHにおける研修体験に基づいた貴重な話をされた。講演に先立ち、ワイスマン博士は、MGHの国際プログラム部長のジョーンズ氏およびペッカマン氏と同行され、聖路加国際病院を表敬訪問された。MGHでは病院全体で看護部の国際的教育プログラムを推進しており、いろいろな看護領域からの人材の交流が発展することを希望されている。　（地域看護学：野地有子、成木弘子、佐藤玲子、結城美智子）

Carolyn Mary Byrne準教授の招聘について

マックマスター大学看護学部の看護教育、地域精神保健のCarolyn Mary Byrne準教授が11月5日～11月15日まで10日間来日された。この招聘は、11月10日に開催された日本私立看護大学結成20周年記念事業の記念講演の講師として、また、1)看護教員の教育に関する意識改革、2)教員の教育方法に関する資質の向上、3)Problem Based Learningの導入およびPBLの教材と教育方法の開発：日本の文化・学生気質に応じた教材と教育方法の探究の目的のために、平和中島財団外国人研究者助成によって実現した。

Carolyn Mary Byrne準教授はマックマスター大学看護学部の主任でカリキュラム立案から教材開発まで、大学のリーダーとして指導的な役割を果たしている。看護教育におけるProblem Based Learningの第一人者でもあり、本学の小山眞理子教授とも親しい。

本学では、大学院生および教員を対象に講演と現在PBLを導入した教育を行っている母性看護学のスタッフとのワークショップを行った。また、日本私立大学協会加盟校でも下記の通り講演・ワークショップを担当した。

1)聖路加看護大学大学院：看護教育の歴史と将来への展望
2)聖路加看護大学：マックマスター大学における看護教育
3)東海大学健康科学部：看護教育における教授法
4)慶應義塾看護短期大学：教員の教育方法に関する資質向上
　　：看護教育へのPBLの導入
5)日本私立大学協会20周年記念講演：看護教育方法の改革－Problem Based Learning－
6)藤田保健衛生大学：マックマスター大学における看護教育

お母様とともに来日された先生は気さくで、あたたかなお人柄で初対面でも以前から友人であったかのような感じを抱かせる先生であった。看護教育はどうあるべきかはもちろんのこと、看護教育への取り組みの姿勢と情熱にも多くのことを学んだ。本学での母性看護学のワークショップでは活発な質疑応答がなされ、実際にTutorの役割を果たしている教員にとって、疑問点・問題点に関する解決の糸口を見いだす貴重な機会となった。また、再来日を約束し、PBLの導入に取り組もうとしている大学もあり、今回の来日効果は大きい。

（私大協会実行委員　岩井郁子）

Dr. William L. Holzemer の招聘について

1995年度も、日本私学振興財団からの一部補助を得て、ホルツマー先生を招聘することができた。今年は、先生のご病気という思いがけないハプニングがあり、学生にとっても教員にとってもきついスケジュールの3週間となった。これまで何回も日本に来られているのだが、いつもお元気でエネルギッシュなため、ホルツマー先生が病気になられるなどとは予想だにしていなかった。修士課程の1年生全員は、初日のクラスを緊張した思いで待っていたのだが、東京に到着してすぐ体調をくずされ肺炎とのこと。結局、1週間後からクラスが始まった。修士・博士とも、2週間で予定通りのクラス全部をこなし、レポートやプレゼンテーションも完了するなど、学生にとってはハードな2週間だった。

ところで、この間、健康管理室の中山久子さんが聖路加国際病院の外来とコンタクトをとって下さり、いろいろご配慮をいただいた。担当医からは直ちに入院のすすめがあったにも関わらず、さすが医療費の高いアメリカに住んでおられるだけあって、セルフケアができるのに入院の必要なしと、ホテルからの通院治療であった。おかげで、先生は身をもって聖路加の看護を経験されたわけだが、はたしてその感想はどのようなものだったのか、なんとなく聞きそびれてしまったままである。

(看護研究担当：羽山由美子)